

“体験的”三港物語

日本政策金融公庫 和歌山支店 前支店長

金子英一郎

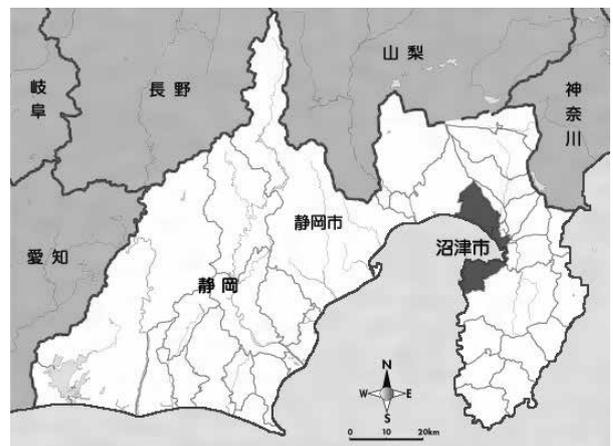


はじめに

今回、寄稿のご依頼を受けて引き受けるかどうか大変迷った。書き物は苦手であつた文書表現や記述内容に筆者の独断的なもので事実誤認などがあるかもしれないが、あくまで私がこれまで勤務、生活してきたまちに関する「体験的」コラムということでご容赦願いたい。また本稿での記述は、筆者の属する機関の見解とは何ら関係のないものであることを申し添えたい。

1 沼津（平成8年4月～10年7月）

私が、沼津に転勤した平成8年の沼津は人口が約21万人であった。（平成28年では19万9千人）。駅の南口西側や北口は駐車場や空き地で再開発待ちといった状況だった（現在では南口西側は商業施設、北口はホテルやコンベンション施設などが建っている）が、駅前には西武百貨店（同百貨店の地方店第1号として昭和32年に開店した歴史と伝統のある百貨店であったが、平成25年1月に閉店）があり、商店街は駅に一番近いアーケード商店街には賑わいがあった。郊外型ロードサイドショップがバイパス沿いにできていたが、大規模なショッピングモールではないものの、中規模の複合商業施設がある程度であったことも駅前が大きく疲弊しなかった要因の一つかもしれない（ただ、駅から離れた商店街はシャッターの下りた店が多かった。）最近では、沼津市も和歌山市と同様にリノベーションまちづくりを行ってお

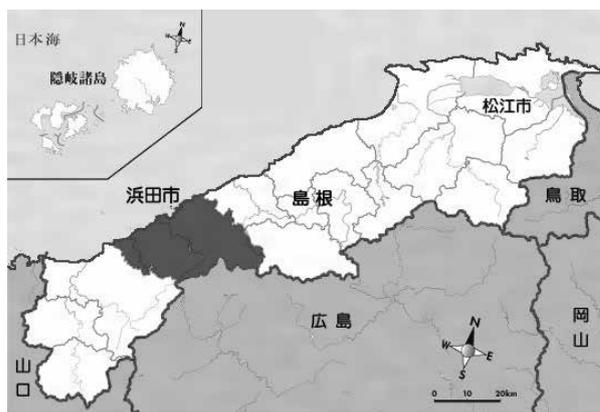


り、抱える課題は同じようだ。

沼津港には、西伊豆の土肥町などに向かう定期船の小さな乗船場と魚市場があったが、都心に近い立地から、魚のほとんどは東京方面に行ってしまうといわれ、地元の魚屋では「底もの」と呼ばれる、東京にもっていても高値が付かないような深海魚などの魚介類も売られていた。「デンデン（オオメハタ）」「ノド黒（日本海のノドグロ（赤ムツ）とは違うムツの仲間です。小ぶりのもの）」など珍しい名前のついた魚や「イルカ」「ボラ」「カメノテ（和歌山ではセイと呼ばれている）」「ナガラミ」などがスーパーの鮮魚売り場に並んでいたのを記憶している（いずれも和歌山でもとれるものであるが、和歌山のスーパーでは見かけない）。話を港に戻そう。港にある飲食店はといえば、地元では有名な寿司屋と大きなエビフライやしらす桜エビ天ぷらで有名な店があったものの一方では閉店する店があるなど、にぎわいのあった同じ静岡県内の焼津港と比べ活気があるとはいえない港であった。ところが、昨年久しぶりに港に行ってみたのだが、魚市場は、私が住んでいた当時とは比べ物にならないくらいの賑わいとなっていた。首都圏といった大商圏から近いという立地を活かしたマーケットモールやあえて「深海魚」（グロテスクなものが多い）にスポットをあてた水族館がマスコミから注目を浴びたことが賑わいの要因かもしれない。余談であるが、沼津や伊豆の言葉には語尾に「ら」が多くつく。和歌山で「いこら」と聞いたとき同じだと思った。また、鈴木姓も多い。古くから黒潮で結ばれていたことを感じさせる。

2 浜田（平成23年4月～26年3月）

浜田市は島根県の西部の中心都市である（平成24年当時人口5万8千人）。どんよりとした空と岩場に波が打ちつける昔の某映画会社のタイトルバックのような寒々とした日本海とはイメージとは全く違う青い空に青い海が広がっ



ている（浜田に初めて来た人たちは海を見て「日本海じゃないみたい」と感動する）。

浜田市は人口減少が大きな課題で周辺町村を合併しても6万人程の状況下であったが、平成25年に現在の久保田市長が就任し、ふるさと納税（平成26年度約7億円、平成27年度約20億円）で注目を浴びたり、シングルマザー移住施策や敬老乗車券の無料配付など次々と地方創生の施策を打ち出していることは周知のことと思う。

浜田漁港は全国で13港のみが指定を受けている特定第三種漁港である。沖合底曳網、中型まき網漁業が基幹産業でその他一本釣、定置網漁業もあり、陸揚げされる魚種は多岐に渡る。競りは、上着で指を隠して指で買値を出す「懐競り」といわれる独特の方法で行われる（最近はこの方法によらない取引も多いようではあるが）。水揚げされる魚のうち「どんちっち」（地元の伝統芸能「石見神楽」の拍子からきている）と名付けられブランド魚となっている「アジ」「ノドグロ」「カレイ」は市場価値が高い。なかでも「ノドグロ」は、最高級魚で大阪などに出荷され、地元ではそんなに多くは出回ってはいなかった印象だった。イカも多く水揚げされ、特に白イカは大変新鮮でおいしく（地元の方は、イカが好みの方）、地元で多く出回っていた。シーズンになるとイカ釣り船の漁火をバックに浜辺で舞われる石見神楽がより一層幻想的なムードを醸し出す。

漁港の活性化については、魚食教育の観点も含め「七輪もって大集合」という親子やグループで参加し七輪で今水揚げされた魚を焼いて食べるといったイベントや「親子でさかなのさばき方教室」など当時からいろいろ工夫していた。

漁港に隣接する「お魚センター」は、開業した当初は広島などからの海水浴客などの観光客の土産物の購入の場として繁盛したらしいが、私が暮らしていたころには集客・売り上げは激減し、入居していたテナントも歯抜け状態となっている状態であった。

最近、アイデアマンの久保田市長の下で大学生の意見を取り入れるなど再活性化が進められている。

3 和歌山（平成26年4月～29年3月）

和歌山には平成26年4月から暮らしてきた。海あり山あり川ありと豊かな自然がそろっている。和歌山城、和歌浦をはじめとした観光資源も豊富だ。

浜田から和歌山に到着して、まず目に飛び込んできたのは和歌山城であった。ちょうどその日は桜の花見で賑わっていた。沼津、浜田も城はあった（もっとも城跡であるが）。浜田城には、かつては三重櫓（浜田藩は石高約5万石であったが、天守の代わりに建てられたこの三重櫓は10万石級の立派なものであったといわれている。）があったが、維新戦争において長州の大村益次郎に敗れた藩主が自焼退却して消失していた。沼津三枚橋城は城郭自体が消失して石垣の名残程度しかなかった。お城のない埼玉県の浦和で育った私にとって、壮大な連立式天守（近時松江で見つかった絵図では、初期の江戸城も連立式天守であったようである。初代藩主徳川頼宣は秀忠に命じられた紀州転封を嫌がったといわれている。55万5千石に加増されたことによって受諾したといわれているが勝手な推測だが、家康にこの上なく寵愛されていた頼宣だから、和歌山城にこの天守があったこ

とも転封を受け入れた一因だったのではないか。）を持つ和歌山城は大変立派で魅力的な城郭であると感じた。御橋廊下や紅葉溪庭園も魅力的な景観である。

毎日お城のお濠を通過して通勤しているのだが、今では風景の一つとなってしまったのか、天守閣を見上げることはほとんどなくなってしまった。多くの市民の方もそうかもしれない。そうであれば、まことにもったいないことである。

4 和歌山へのメッセージ

沼津、浜田で“体験的”に感じてきたことから、和歌山に応援メッセージとして伝えたい。

沼津魚市場は、東京といった大消費地を背景に観光に特化した魚市場のマーケットモールを整備し、賑わいを見せている。浜田魚市場は、観光に特化しようとしたが、広島から近いというものの大消費地が控えているわけではなく、さりとて市民が利用するような市場とはなっておらず苦戦してきた。

では、和歌山はどうか。和歌山市は、中央卸売市場の整備を計画している。道の駅などを併設するなど観光の起爆剤とする計画のようである。

中央卸売市場は、南に和歌の浦、紀州東照宮、養翠園といった観光スポットがあり、観光道の駅として魅力的な位置にあると思う。ちなみに、養翠園は池泉回遊式の素晴らしい庭園である。より魅力的に整備すれば、名古屋の徳川園に勝るとも劣らない庭園となるだろう。

私は、中央卸売市場の観光拠点化の整備にあたってはマリーナシティ内の観光施設とのすみ分けを考えるとともに、目指すモデルとしては観光客向けとしてだけでなく、公共交通を整備し市民の台所として市民が日常的にこぞって買い物に来るような地産地消型のマーケットモールになることが必要ではないかと考える。

また、中央卸売市場は沼津や浜田と違い、海鮮だけでなく野菜や果物も販売できる規模の施

設とすることができることも強みになると思う。さらには地場産品である日用雑貨品や木工品、ニット製品、皮革工芸品などもアウトレット価格で販売する店も併設すればより魅力的な広がりのあるマーケットとなるのではないか。

営業時間にも工夫が必要かと思う。沼津港の飲食店は地元の水産加工業者が経営しており、夜9時まで営業している。多目的会議室も併設し観光客のほか地元の人々も利用している。

島根でも和歌山でも「ここにはなにもない。」という話をよく耳にした。たしかに「東京的」なものはないかもしれない。しかし、東京にはないものがたくさんある。海のない埼玉県で山も遠い浦和（現さいたま市）で育った私にとっては、海、山は憧れである。埼玉はたしかに東京に近い。しかし和歌山も大阪からさほど離れてはいない（感じ方は人それぞれ違うかもしれないが、浜田や沼津から大都会に出るより近い）。そして海は心の癒しとなる。いやなことがあっても海を眺めていると（とくに太平洋）「海は広い。遠く海外まで広がっている。それに比べたら小さいことで悩むことはない」と気持ちが落ち着く、さらに夕陽を見ながらだと、感傷的にはなるが、必ず朝がやってくるという希望も湧いてくる。自然が手の届くところにあるということのはかけがえのないものであると思う。「ないものはない」という隠岐の海士町のキャッチフレーズがあるが、和歌山には多くの資源があり、まさに「ないものはない」といえるのではないか。胸を張って「つれもて来てら」といえる観光地として進化していくことを願ってやまない。3年間暮らした和歌山は、私にとって第二の故郷になった。いつの日かまた和歌山で暮らしたいと思っている。最近市内で地ビールも醸造されはじめたようだ。和歌山の未来に乾杯！